琉球大学学術リポジトリ

高機能自閉症児における社会性障害の改善に関する研究

メタデータ	言語: 出版者: 神園幸郎 公開日: 2009-03-06 キーワード (Ja): 高機能自閉症児, 社会性障害, 自己制御, ファンタジー, 自閉的ファンタジー, 共同注意, 愛着関係, 指さし キーワード (En): high-functioning autism, social disorder, self-control, fantasy, autistic fantasy, joint attention, attachment, pointing 作成者: 神園, 幸郎, Kamizono, Sachiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9087

自閉性障害児の社会性障害と模倣の関係について

－ ある自閉性障害児における親子関係の変遷を通して －

神園　幸郎　　豊里　優奈　　又吉ゆうき

Relationship between Social Impairment and Imitation in Children with Autism

—On the basis of making an analysis of mother-infant relationship in a girl with autism—

Sachiro KAMIZONO　Yuna TOYOSATO　Yuki MATAYOSHI

自閉性障害児の社会性障害と模倣の関係について

― ある自閉性障害児における親子関係の変遷を通して ―

神園　幸郎　　豊里　優奈　　又吉ゆうき

Relationship between Social Impairment and Imitation in Children with Autism

− On the basis of making an analysis of mother-infant relationship in a girl with autism −

Sachiro KAMIZONO*　Yuna TOYOSATO*　Yuki MATAYOSHI*

This study investigated the relationship between imitation and social impairment in children with autism over a 2yr period. The subject was a girl with autism. Its analysis was carried out in mother-infant play situation, to identify when her imitation appears and what developmental processes her imitation follows. In early stages of attachment, her imitations were followed by the demands of her mother. When infant became aware of mental contents, e.g. emotion and intention, of her mother, the imitations became more active and voluntary. Once a complementary mother-infant relationship was attained, imitations appeared in mother-infant communication situation and also her imitation itself turned play. Therefore, it was suggested that both quality and quantity of her imitations have reflected the mother-infant relationship. Imitation learning was discussed as a method of intervention to social impairment of children with autism.

Key word: autism, imitation, mother-infant relationship, attachment, development

はじめに

自閉症児の中核障害は社会性障害である。この社会性障害を包括的に説明する枠組みとして、Baron-Cohen, Leslie & Frith (1985) による「心の理論欠如仮説」が登場するに至って、自閉症児の社会性障害に関する研究は飛躍的に前進した。最近の自閉症研究は「心の理論」の発達的前駆体としての共同注意、模倣、そして共感などの獲得過程にその焦点が移ってきた。

Meltzoff & Gopnik (1993) と Rogers & Pennington (1991) は「心の理論」の前駆体として模倣の重要性を指摘し、自閉症児の模倣欠陥が彼らの「心の理論」の欠如に繋がっている可能性を示唆した。通常の発達において、自発模倣はほぼ出生直後から出現し (Meltzoff, 1988; Meltzoff & Moore, 1989; Kugiumutzakis, 1999)、乳児期の母子相互作用において重要な役割を演じる (Trevarthen, 1979; 1999; Stern, 1985)。幼児期になると、模倣は遊びやコミュニケーションをはじめとする社会的相互作用の発達にとって重要な働きをするようになる (Nadel & Peze, 1993; Tomasello, Kruger, & Ratner, 1993; Nadel et al., 1999)。発達に及ぼす模倣の

*Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

役割についての先行研究を概観すると、自閉症児が示す模倣欠陥が、彼らの社会性障害の基底をなす一つの要因として作用している可能性を想定できる。

自閉症児の模倣欠陥については、DeMyer et al. (1972) による最初の実験研究従来、多くの研究によって指摘されてきた。これらの研究には、ウズギリス・ハント尺度 (Uzgiris-Hunt Gestural Imitation Scale) のジェスチャー模倣課題を使った研究 (Curcio, 1978; Dawson & Adams, 1984; Sigman & Ungerer, 1984) 手や指の動きの模倣に関する研究 (Ohta, 1987)、情動の表情表出の模倣に関する研究 (Hertzig, Snow, & Sherman, 1989; Loveland et al., 1994)、パントマイム動作や想像上のモノの操作についての模倣の研究 (Bartak, Rutter, & Cox, 1975; Curcio & Piserchia, 1978; Hammes & Langdell, 1981; Rogers, Bennetto, McEvoy, & Pennington, 1996) などがある。このような自閉症児の模倣欠陥を説明する仮説として、これまで覚醒仮説 (Dawson & Lewy, 1989)、情報処理仮説 (Smith & Bryson, 1994)、そして動機仮説 (Whiten & Brown, 1997) などが提唱されてきた。しかしながら、いずれの仮説も自閉症児の模倣欠陥を網羅的に説明できるものではなかった。

ところで、模倣を行う上で他者の意図や感情などの内的状態の理解や、自己と他者の身体的同型性の理解など、自己・他者理解の問題が重要であることは論を待たない。ところが、Meltzoff & Gopnik (1993) は、こうした考えとは逆に、模倣行動そのものが、自他の身体的同型性や他者理解の形成にとって、重要な働きをすると主張した。すなわち、ヒトは生まれつき備わった交差様相転写 (cross-modal mapping) の能力に基づいて他者の行動を模倣することによって「身体のlike me 経験」、すなわち自己と他者の身体の同型性を獲得する。そして、他者との情動の共有を仲立ちとして、「身体のlike me経験」が「心のlike me経験」をもたらし、他者の内的状態の理解が成立すると言うのである。彼らの主張によれば、模倣は他者理解の形成にとって必須の要件であるということになる。この考えに沿えば、自閉症児には他者理解の成立に必要な模倣が欠落（これがどうして起こるかについて、彼らは言及していない）しているために、身体レベルの“like me”感覚が起こらず、その結果、心のレベルの“like me”感覚も生じないことになる。彼らは自閉症児において他者の心の表象が成立し難いのは，このような背景があるからだと論じた。Rogers & Pennington (1991) も同様に、発達初期の模倣欠陥は、その後の情動知覚や間主観的関係の欠陥さらには心の理論の欠如へとつながり、自閉症児に見られる様々な欠陥を生み出すと主張した。

以上の先行研究を概観すると、自閉症児の中核障害である社会性障害の形成過程に、彼らの模倣欠陥が重大な影響を及ぼしている可能性が想定できる。そこで、本研究では自閉症児における他者関係の発達変化と模倣行動の関連を明らかにする。

ところで、自閉症児の模倣欠陥に関する知見は、そのほとんどが実験的な統制場面で得られたものが多く、その限りでは客観性や信頼性は高い。しかしながら、これらの実験結果は実際に自閉症児における模倣の特徴を十分に表しているのであろうか。筆者らは自閉症児を対象とする臨床場面や彼らの日常生活場面において、模倣行動をたびたび観察するとともに、いくつかの研究でも示唆されているように（例えば，Morgan, Curter, Coplin, & Rodrigue, 1989; Charman & Baron-Cohen, 1994)、彼らの模倣欠陥は発達とともに次第にその特徴が薄らぐとの印象を得ている。そのため、本研究では自閉症児の模倣行動を実験場面ではなく、比較的日常性が確保された自由遊び場面において縦断的に観察する。

先にも指摘したように、模倣は他者理解の水準と密接に関係することから、自己と他者の関係性の質を背景として模倣行動を把握する必要がある。そのため、本研究では最も身近な他者であり、愛着対象でもある養育者をモデルとする模倣行動を観察する。

既に、筆者は自閉症児とその親の遊びを中心とする相互交流場面の縦断的な観察を通して、愛着関係の質的変遷を記述している（神園，2001, 2002)。本研究は、神園 (2002) で対象とした事例について、親子の交流場面で見られた模倣がどのような経緯で出現し、それがどのような変化の

過程を辿るかを、親子の関係性の質的変遷との関連で検討し、自閉症児における社会性障害と模倣との関係について論じる。

方　法

1．対象児のプロフィール

対象児は199×年生まれの女児である。父20歳と母20歳の第１子として生まれた。本児は在胎36週の早産で、生下時体重は2100ｇであった。黄疸のため保育器に５日間入った。定頸３カ月、始歩10カ月で乳児期前半の発育は特に問題はなかった。１歳６カ月児健康診査において言葉の遅れと多動を指摘された。２歳６カ月になって公的な療育機関の医師から自閉症と診断された。その後、その療育機関で週１回の割で言語訓練と療育訓練を受けた。３歳４カ月頃から、「ダッコ」「コオリ」などの要求の言葉が出はじめた。絵本にも興味を示し、母親が読み聞かせをすると、気に入った部分だけを模倣するようになった。両親が共働きのため、２歳の頃から保育園にあずけられたが集団に馴染めず、園側から拒否された。そのため、２歳半から別な保育園に通いはじめるが、約１年後、その園でも同様な理由で拒否された。そして、３歳４カ月になって公立の保育所に障害児保育の該当児として入所した。入所当初は各保育室や事務室を歩き回り、部屋の照明、電話、電気ポット、扇風機などのスイッチやキーボードを操作するといった行動が頻繁にみられた。しかし、保育所の環境に慣れるにつれて、担当の保育士とも目が合うようになり、表情が豊かになった。遊びは専ら一人遊びで、紐通しや型板はめなどに熱中した。本児の一人遊びに他児が加わってくると、途端にその場から立ち去り関わりを避けた。遊びの順番などにこだわりがあり、それが崩されるとパニックを起こすこともあった。言葉は反響言語がほとんどあったが、場や状況に合った言葉も僅かであるが出現していた。保育所に入所して１年が経過する頃には排泄も自立し、保育所の日課を一通りこなせるようになった。本児が保育所生活の２年目を目前にした４歳５カ月から、本研究の観察が開始された。本児は保育所に２年間通所した後、公立の幼稚園に１年間通園し、現在、知的障害養護学校の小学部２年生に在学している。観察は現在も継続中であるが、本研究では本児が４歳５カ月から７歳２ヵ月までの約２年９ヵ月を分析対象とした。観察開始に先立って実施された新版Ｋ式発達検査における全領域の発達指数は57であった。

2．手続き

1）親子関係の観察

対象児とその親は２週間に１回の割で筆者が所属する大学に通ってきた。最初に対象児と親、そして筆者と本事例を担当する学生２名で約10分程度の茶話会を持った。子どもの様子が落ち着いたところで、プレイルームに移動した。まず、対象児と親がプレイルームで遊具や玩具を使いながら自由に遊ぶ時間を設けた（以下、親子遊び場面と略す）。本事例の観察を始めて約１年間は両親がそろって親子遊び場面に参加することが多かったが、２年目以降は父親の仕事の都合で父親が参加できなくなり、母親だけが参加する母子遊び場面になった。本研究で分析対象とされた1999年３月から2001年12月までに実施された55回のセッションのうち、親子３人でのセッションが14回、父子が４回、母子が37回であった。この親子遊び場面の様子は同室する撮影者によって約30分にわたってＶＴＲに収録された。次に親と特定の他者（学生）が入れ替わり、対象児と特定の他者との自由遊びの場面（他者遊び場面と略す）が設定される。他者遊び場面も同様に撮影者によって約30分間、ＶＴＲに収録された。ＶＴＲ資料はトランスクリプトされ、分析の資料として利用された。なお、本研究では親子遊び場面だけを研究対象とした。

2）模倣場面の抽出

筆者と共同研究者の２名は55回の母子遊び場面のＶＴＲ資料から本児の模倣行動が出現している場面を抽出し、ＤＶＤディスクに録画した。その際、筆者と共同研究者の判断が異なった場合、両者で協議して模倣行動か否かを決定した。音声模倣として抽出された場面が214場面、動作模倣が19場面であった。なお、両者の一致率は音声模倣が87％、そして動作模倣が93％であった。

3．分析方法

1）親子関係の分析

分析は特定の他者となる学生と撮影担当の学生それに筆者の３名によって行われた。親子遊び場面と他者遊び場面を、遊びの全体的な特徴、親および特定の他者への対象児の愛着行動、そして対象児の行動特徴などの視点で３名の分析者がそれぞれ独自に分析した。

2）模倣行動の分析

(1) 音声模倣

抽出された214場面について、本児の音声模倣が出現した前後の行動の文脈を中心に記述した。その際に、親からの模倣要求があったか否か、音声模倣に随伴した行為があったか否か、モデルとしての親への注視が存在したか否か、音声模倣の完全度、そして模倣された音声の反復回数などについて調べた。なお、それぞれの場面にはエピソード番号を付与して分析に利用した。

(2) 動作模倣

動作模倣として抽出された19場面について、それぞれの動作模倣が出現した前後の行動文脈を詳細に記述した。音声模倣と同様に、それぞれの場面にはエピソード番号を付けて分析に利用した。そして、それぞれの動作模倣を先に指摘したミミクリー、エミュレーション、ファシリテーション、そして真の模倣の４つのカテゴリーに分類した。

Roeyers, Oost, and Bothuyne (1998) によれば、模倣行動はその性質からミミクリー (mimicry)、エミュレーション (emulation)、ファシリテーション (facilitation, stimulus enhancement)、そして真の摸倣 (true imitation) の４つの種類に分類できるという。それぞれは、次のように意味づけられている。すなわち、ミミクリーは、モデルの運動・動作の目的を理解せずにその動作を再現することである (Tomasello, Kruger, & Ratner, 1993)。エミュレーションはモデルの運動・動作の目的を理解し、それと同じ目的を達成するために、独自の実行方法をとることである (Wood, 1989)。ファシリテーションは他者の行為を摸倣することが自らのレパートリーの中に既に存在している行為を促進することを指す (Hay & Murray, 1982; Tomasello, Savage-Rumbaugh, & Kruger, 1993)。そして、真の模倣はモデルの新奇な行動をその形態と適切な機能的文脈の両面で再現することである (Tomasello, Kruger, & Ratner, 1993)。

Roeyers, Oost, and Bothuyne (1998) の指摘を考慮して、本研究は自閉症児の動作模倣を真の模倣だけに限定せず、模倣行動としては不完全な形態になるエミュレーションも含めて、上記の４つのカテゴリーを抽出し、分類した。

結果と考察

1．親子関係の変遷

対象児の年齢が４歳５ヵ月から７歳２ヵ月までの２年９ヵ月に実施された55回の観察記録について、親子の関係性に焦点化して分析を行った。その結果、対象とした観察期間は関係性の質の違いによって、表１に示した７つの時期に区分された。なお、第１期から第６期までについては、既に神園 (2002) で詳細にその特徴が記述されているので参照してほしい。したがって、ここでは第１期から第６期までについては、本論を展開する上で必要となる部分の記述を神園 (2002) から抜粋して記載した。

表１　各時期における関係性の特徴

時期	回数	関係性の特徴
第１期	１回～４回	道具的対象としての父親への接近
第２期	５回～15回	心理的安全基地としての母親への愛着
第３期	16回～24回	遊びの対象としての母親への志向性の芽生え
第４期	25回～34回	母親の内面性の気づきとそれへの働きかけ
第５期	35回～40回	自己の内面性の気づきと相補的関係性の成立
第６期	41回～50回	環境変化による情緒的不安定
第７期	51回～55回	母親との関係性の回復

第１期：道具的対象としての父親への接近

この時期、本児は父親への接近行動が顕著であ

り、母親には逆に回避的な行動を示した。父親との遊びは「高い高い遊び」、「くすぐり遊び」、そして「トランポリン遊び」など、専らダイナミックな身体運動遊びが中心であった。本児は父親が仕掛ける運動遊びに興じて笑顔やダイナミックな身体運動を表出した。しかしながら、本児は父親と快の情動を共有して遊びを展開していたわけではなく、父親を道具的に利用することで自己の要求を達成しているに過ぎなかった。その証拠に、ひとりで達成できる遊び、例えば棒差しや型はめなどに本児が興じている時に父親がその遊びに加わろうとすると、嫌がって父親の手を払いのけたり、父親を避けて遊具を持ったまま父親から離れた場所で再び遊びはじめるのであった。つまり、本児は自分ひとりではできない遊びを、父親を道具として利用することで実現しようとして、父親に接近していた。

他方、母親はこうした父子の関わりをただ傍観的に眺めていることが多かった。こうした母親の態度は、遊びを父親に任せているためではなく、母親自身が本児と上手く遊べないために現れたものであった。母親が本児に関わりを持とうとする場面でも、まるで身辺自立を躾るかのように本児の気持ちを無視した強引な関わりをすることが多かった。当然のことながら、本児は母親に回避反応を示した。

以上のように、この時期本児は父親に接近し、母親を回避するというように父母に対して全く逆の関わりを示した。しかしながら、両親に対する本児の関わりの本質は、基本的に大きな違いはないと考えてよい。なぜならば、前述したように父親との遊びは情動の共有を伴なうものではなく、基本的には本児のひとり遊びに他ならないからである。

第２期：心理的安全基地としての母親への愛着

この時期になると、本児は父親の誘いかけに応じなくなり、父親との運動遊びを中心とするダイナミックな関わりが減少した。他方、父親への接近行動の減少に呼応するように、母親への志向性が急速に高まってきた。例えば、母親を見る頻度が増加したり、以前はほとんどなかった母親への身体接触が頻繁に見られるようになった。さらに、母親が傍にいないと常にその居場所を探すようになった。不安な場面や不快な事態になると母親を求めるようになったことから、本児は母親を心理的安全基地とみなしているものと考えられる。こうした本児の母親への愛着はその原因を母親の態度に求めることはできない。なぜならば、母親の本児に対するかかわりは以前と本質的な違いは認められないからである。したがって、この時期における本児の愛着形成の背景を推測することは難しい。

上述したような本児の母親に対する愛着水準の高さとは裏腹に、遊びは依然として一人遊びから広がりが見られず、本児は母親の介入を決して許容しなかった。本児にとって快適な状態は、母親の介入がなく、自分の意のままに行動でき、しかも心理的安全基地としての母親が見える範囲にいることである。こうしたことの背景として、次のようなことが想定された。すなわち、本児には母親への接近要求は存在するものの、これまでの母親の不適切な対応によって形成された回避動因が同時に存在するために一種の葛藤状態にあり、その表現型が前述した状態、すなわち母親の見える範囲での一人遊びになったと考えられる。

母親は本児の一人遊びに介入するたびに本児の拒否に合うので、次第に本児への働きかけ自体が減少してくる。その結果、本児は一人遊びに終始し、それを母親は少し離れた場所から見守るという状態が一層顕著になった。

第３期：遊びの対象としての母親への志向性の芽生え

第２期になって本児は母親を心理的安全基地とした行動を示すようになったが、遊びの形態は一向に変化が見られず、相変わらず一人遊びに終始していた。しかも母親は本児のこの状態を改善しようとすることもなく、ただ漫然と傍観している状態であったため、本児と母親の関わりはほとんど見られなくなっていた。

そこで、第15回セッションにおいて、この状態を改善するために筆者は母親に対して以下に示す２つのアドバイスを行った。まず第１に、母親には常に本児の傍に居ることを心がけること、第２に本児の興味や関心を尊重し、なおかつタイミン

グよく関わるように勧めた。

アドバイスの効果はすぐに次のセッションで認められた。母親はこれまでとは違って常に本児の傍に寄り添って、本児の遊びの流れに沿った関わりができるようになった。本児の目を見ながら声かけをする場面や、本児が発する不明瞭な言葉を何とか理解しようと努めている場面など、これまでの母親とはまるで別人のような母親の変貌ぶりであった。その結果、母子の関係性に変化が見られるようになった。まず、第一に本児は母親が接近しても嫌がらなくなり、逃避傾向は完全に消失した。第2に、本児の視線が母親に向かう頻度が高まり、母親への志向性が高くなった。例えば、母親がフラフープを使って縄跳びのような跳躍をしている様子を見て、本児もフラフープを持って母親と同じような行為をしてみるといったように、母親の行為の模倣が出現しはじめた。また、初歩的ではあるが、遊びのなかで母子のやり取りがみられるようになった。例えば、シャボン玉遊びにおいて、本児が自分の吹き棒を母親に渡し、母親をシャボン玉遊びに誘う場面があった。このことは、本児が母親を遊びの対象として認識しはじめていることを示している。

本児の母親への関わりは、第1期における自己の要求を実現するために父親をいわば道具として利用した関わりとは本質的に異なり、明確に母親を遊びの対象としたものであった。他方、この時期の父子関係は第1期の母子関係そのものであり、全く関わりは見られなくなった。

この時期における母親の関わりは、あくまでも筆者の具体的なアドバイスに基づくものであった。母親自身の気付きに裏打ちされた関わりではないために、セッションを重ねるにつれて母親の関わりは次第に硬直化し、第20回を過ぎる頃から以前の母親の関わりへと後戻りしはじめた。母親のこうした変化は、ようやく芽生えはじめた本児の母親への志向性を急速に萎えさせることになり、結果的に本期の後半になって母子の関係性は再び冷え込むことになった。

第4期：母親の内面性への気付きとその内面性への働きかけ

急病のための入院を経て1ヵ月ぶりに訪れた母親は、以前とは明らかに印象が異なり、本児に対して主体的で積極的に関わるようになった。母親は静的な関わりしかしなかった以前とは打って変わって、トランポリンやボール遊びなどの運動遊びに積極的に関わりはじめた。そのため、母子の遊びがダイナミックに展開するようになった。

こうした母親の関わりに呼応するように、本児の行動が母親への志向性を増してきた。母親の遊びの誘いかけに、嬉しそうに応えたり、母親の動作やモノの操作の仕方などに関心を示し、注意深く観察するようになった。その結果、母親の回すフラフープや縄跳びをみて、その動作を模倣するようになった。母親と同じことをしてみたいという本児の思いは、動作の模倣に留まらず、心的な同化へと及ぶことになる。本児は相手となる他者の言葉かけや表情、仕草などからその人の情動を感じ取り、しかもその情動に自己が同化することによって自らの行動が影響されるようになった。いわゆる、社会的参照行動が出現しはじめた。

また、本児は他者からの賞賛に対して、ポジティブな情動表現をするようになった。例えば、本児の「でんぐり返り」を母親が誉めると、本児は嬉しそうに微笑んで、その後何度も前転をくり返した。このことは母親の情動に自己が同化して、母子が情動を共有するだけではなく、そのことを再現するために母親の内面に働きかけるといった本児の強い志向性を表している。

母親の内面に働きかけるという本児の志向性は、次第に明確になり、そのこと自体が遊びの様相を強く帯びるようになった。母親の反応を期待してわざと間違ったことを言い、それに対する母親の反応に言い返したりなど、母子間のこうした言葉遊びが頻繁に出現した。この時期に母子間の言葉のやり取りが活発になった1つの要因は、本児が母親の情動を感知し、それに自己の情動を同化させることによって、母親と情動を共有できる場面が増えてきたことによるものと考えられる。

本期は母親の入院を契機として，母子の関係が質的に転換した時期であった。以前から母親は第二子を切望していたが、この時の入院で母親の望みが完全に絶たれてしまった。母親の悲しみは想像を絶するものであったと思われる。しかしながら、そうした経験が本児への積極的な関わりを生

み出したということは想像に難くない。母親は入院を契機として大きな意識変革を成し遂げたものと思われる。そのことが、母親の本児に対する関わり方の変更をもたらし、引いては本児が母親の情動を内面化できるようになって母子関係の質的な転換をもたらしたものと思われる。その意味で、この時期における母親の役割はきわめて大きいと言わなければならない。

第５期：自己の内面性への気づきと相補的関係性の成立

本期は母子の相互作用が極めて良好に推移した時期であった。この背景として、第４期で指摘した母親の内面の気づきとそれへの働きかけに加えて、自己の内面性への気づきによって、母子の相補的関係が可能になったことが想定される。

本児はこれまで自己の鏡像に対して関心を示し、鏡を見ながら手や足を動かして、自己の身体と鏡像の連動性を確かめるような行動を示していた。ところが、この時期に入り、鏡像の関心が自己の身体の動きから、顔の表情に移ってきた。鏡の前で喜怒哀楽の多様な表情を作り出しては眺めることが多くなった。こうした鏡像の経験を通して自己の情動体験と表情の関係性への覚知が生じ、本児は自己の内面性に気づいたのかもしれない。あるいはまた、発達に伴なって本児に芽生えてきた自己の内面性への気づきが、表情に対する鏡像反応を喚起したのかもしれない。表情への鏡像反応が原因なのか、もしくは結果なのかは定かでないが、いずれにしても本児が自己の内面性に気づいていることは確かであろう。

第４期までの母子の関係は、例えば本児が「する人」、母親は「見る人」という固定化した一方向的な関係でしかなかった。しかし、本期になるとこうした一方向的な関係がほとんど消失し、母子間の双方向的な関係性がみられるようになってきた。したがって、遊びにおける役割交代が可能となり、母子の共同遊びが展開するようになった。こうした母親と本児の相補的な関係性も本期までに可能となった母親と本児の内的状態、とりわけ情動状態の理解によって裏打ちされているものと思われる。

さらに、限られた場面ではあるが、本児は自己と母親の要求を磨り合せて、その場に適応的な行動を選択することもできるようになった。このような要求の磨り合わせや調整も、母親と自己の内的状態の的確な理解を基盤として成立しているものと考えられる。

本期の母子関係はきわめて良好であったが、こうした状態は母子の二者関係だけに限られており、母親以外の他者に対しては以前に比べて大きな変化は認められなかった。このことは、この時期における母子関係は、他者についての表象的理解に裏打ちされて成立しているのではないことを表わしているのかもしれない。

第６期：環境変化による情緒不安定

本期は良好な母子関係が展開された第５期とは様相が一変し、母子の関わりが極端に減少した。本児はモノの操作を中心とする一人遊びに終始し、母親の呼びかけにも応答しないことが多くなった。そして、奇声をあげたり、窓の格子に登って無表情で戸外を眺めたり、何の脈絡もなく突然に部屋から飛び出したりといった、これまでには見られなかった行動が出現した。さらに、情緒的に不安定になったときによく見られる室内の照明を眩しそうに手で遮るといった、いわゆる知覚過敏に基づく防衛反応と思われる行動が度々出現した。

母親の関わり方はこの時期に特に変化した様子はなく、以前と同様に積極的な働きかけを行っていることから、本期における母子の関係性を阻害した主たる要因は、本児の行動や知覚過敏に基づく特有な行動にあると推察される。

母子の共同遊びは成立し難いものの、本児の母親への愛着行動は、本期になってむしろ強固になってきた。このように母子の愛着に揺るぎがなく、しかも母親はこれまで通り適切に関わりを持っていることからすると、本児の精神的不安定性の原因を母子の関係性に求めることはできない。考えられることは、この時期の本児を取り巻く大きな環境の変化である。本期の初頭は本児が幼稚園を卒園し、養護学校に入学した頃であった。自宅から歩いて通っていた幼稚園から、スクールバスで約１時間かけて通う養護学校にかわって、通学方法をはじめ多くの環境が劇的に変化した。養護学校の生活への切り替えは表面上、比較的順調に行

われているように思われたが、母親によれば本児は毎日かなり疲れて帰宅するとのことであった。こうしたことから推測すれば、本児の情緒的な不安定性はこの時期に生じた環境の激変による可能性が強い。

他方、本期における母子の相互交流遊びは乏しいにも拘わらず、本児の認知機能は着実に発達していた。例えば、本児は視線を使って母親に要求を伝えたり、他者を欺く行動を示した。いずれの行動も、自己の行動が他者の内的状態に与える影響を予測できなければ成立しない。それ故、こうした行動は「心の理論」の獲得を前提としている。これらの事実は本児の認知発達がこの時期においても停滞せず、着実に前進していることを物語っている。

本期は環境変化に起因すると思われる本児の精神的な不安定性の要因によって、母子の関係性が低調に推移した時期である。しかしながら、本児の認知能力は着実に発達を遂げた。この時期における本児の認知発達の１つの大きな促進要因として学校生活における多様な経験があげられる。学校生活は本児にとってストレス要因として作用し、情緒の不安定性をもたらす、いわば負の要因であると同時に、多様性のある豊かな経験の蓄積をもたらし、認知的発達を促進させる正の要因としても作用する。本期にみられた本児のアンビバレントな行動特徴については、こうした解釈も妥当性を持つのではないだろうか。

第７期：母子関係の回復

この時期になると、本児は母親との良好な関係を取り戻し、関係性は第５期の水準に回復した。この原因として、第６期で精神的不安定をもたらした環境変化に対して慣れが生じたことが考えられる。その証拠に、本児の学校生活に根ざしていると思われる行動が、セッション中の随所に出現した。例えば、母親とのやり取りの最中に学校の担任の名前がたびたび出てきたり、お菓子を食べる前に習慣化した給食前のことばが発せられた。また、トランポリン遊びにおいては、学校のトランポリンで習得したと思われる以前とは違う跳び方がみられるようになった。さらに、本児は断片的ではあるが、学校での出来事を母親に話すようになったそうである。こうした事実から、本児は学校生活に慣れ、落ち着きを取り戻している様子が伺われる。

本児の情緒的な安定は行動に落ち着きをもたらし、母親との楽しいやり取りを復活させた。例えば、シャボン玉遊びの最中に、本児が吹き出すシャボン玉を母親が「すごいね」と誉めると、本児は自らが作った大きなシャボン玉を指差しながら母親を見て「できた」「大きい」などと嬉々として話しかけた。第５期で指摘したように母親の情動を感じ取り、それに同化して自らもポジティブな感情を持つだけでなく、本期では自らが始発して感情を共有しようとする「叙述の指差し」が見られるようになってきた。これらの事実から、本期における母子の関係性は、第５期の水準以上に達している可能性が推定される。

２．親子関係の変遷と模倣の関連性

本児と親との関係の質的変遷と模倣行動との関連を明らかにするために、前述した親子関係の７つの時期ごとに親子遊び場面に出現した音声模倣と動作模倣について検討した。

１）音声模倣

(1) 音声模倣の特徴

観察当初の本児は、既に１語発話による表現が可能であり、観察後半になると２語発話も出現した。こうした言語的基盤に支えられて、本児は母親との遊び場面において、母親の音声をモデルとする音声模倣が活発に出現した。

一般に、自閉症児における音声模倣はいわゆる反響模倣（エコラリア）としての発話が特徴的である。しかしながら、本研究の開始時期において、本児は既に反響摸倣の出現の時期を過ぎており、対象期間内に反響摸倣はほとんど出現しなかった。わずかに母親の意図を図りかねるときに反響摸倣様の音声模倣が散見されたが、その出現頻度はきわめて小さかった。本研究では明らかに反響摸倣と推定される音声摸倣は分析対象から除外した。したがって、本研究で分析対象とした本児の音声摸倣は、反響摸倣としてのそれではなく、意味理解を伴なった音声の摸倣、すなわち、言語摸倣である。例えば、***母親がフラフープを床に立て、指***

*でひねって回す動作を示範した後、「くるくるして」と言って本児にフラフープを回すように要求すると、本児はフラフープを回そうとして「くるくる」と言う（エピソード14）。*結局、本児は母親と同じようにフラフープを回すことはできなかったが、母親の摸倣要求に応えて動作と音声を摸倣したことは明らかである。同様に、*ボールを投げることを要求して「ぽんして」との言葉に応じて、「ぽん」と言いながらボールを投げたり（エピソード12）、手のひらを重ねて「ちょうだいして」と言うと、「ちょうだい」と言いながら母親と同様のポーズをとるなどの場面（エピソード22）*が指摘できる。母親による「～して」の発語に対して、「～」という本児の音声摸倣は、明らかにモデルとしての母親の発語の意味を理解した上で表出されているものと推察できる。また、*母親が「三輪車しよう」と誘うと、本児は「三輪車」と言いながら三輪車に乗ったり（エピソード54）、トランポリン上で母親が飛び跳ねながら「ジャンプ」と言うと、本児も「ジャンプ」と言いながら跳んだ（エピソード86）。*これらの事実は、明らかに本児は母親が発する音声を意味あるものとして理解し、模倣していたことを物語っている。その後、本児は跳躍する度に繰り返し「ジャンプ」と発語した。母親によれば本児は「ジャンプ」という言葉をこのとき初めて聞き、その意味を理解したとのことであった。なぜならば、本児は初めて聞いて関心を持った言葉は決まってその言葉をくり返すのだそうである。期間中に観察された同様な語として、「カンチョウ」、「コウカン（交換）」、「スポンジ」などが認められた。初めて聞いた言葉でも、その場の状況から即座に意味を抽出して模倣するという本児の音声模倣の特徴を表すエピソードとして興味深い。

以上の事実から、本研究で抽出された音声模倣は、モデルの音声を意味理解なしにそのままくり返すという、いわゆる反響模倣ではなく、明確な意味を随伴した言語模倣であると言える。

(2) 音声模倣と親子関係

観察期間中に抽出された全模倣数は214場面であった。図1は先に指摘した親子関係の7つの時期について、それぞれの時期ごとに1セッション

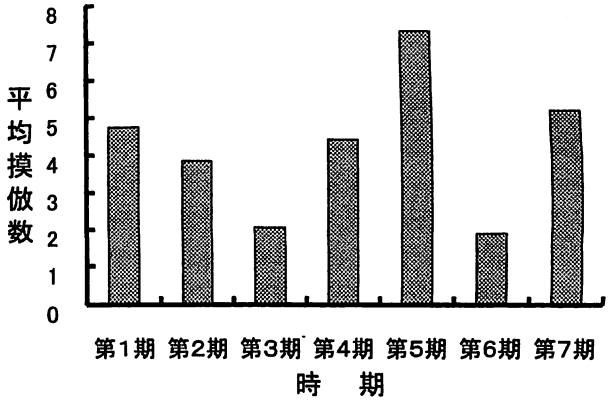

図1　時期別の平均模倣数

あたりの平均の音声模倣数を示したものである。平均模倣数は最も少ない第6期の1.90回から、最も多い第5期の7.33回までの範囲にわたっていた。図から明らかなように、第3期と第6期の落ち込みと第5期の増加が顕著である。先の指摘によれば、第1期は父親の主導する運動遊びと玩具を使った一人遊びが主であった。母親は父子の関わりを傍観的に眺めていることが多く、母親が本児に関わりを持つ数少ない場面でも母親主導の強引な関わりに終始した。第2期になって本児の側に母親への志向性が高まり、母親に対する愛着行動が見られるようになっても、母親の態度は第1期と本質的な違いは見られないため、本児の遊びは専ら一人遊びが中心となった。そこで、筆者による母子関係への介入を行ったところ、筆者のアドバイスが効を奏して母親の関わりが変化した。その結果、母子関係が好転したのが第3期であった。第3期における音声模倣の頻度が減少した背景には、こうした母親の関わりの変化が作用している可能性が考えられる。そこで、それぞれの時期において、親の関わりが模倣場面にどのように表われているかを検討してみた。親の模倣場面への関わりの指標として、親の模倣要求を取りあげた。その結果が図2である。本児の音声模倣が出現したときに、親の模倣要求が存在したか否かをそれぞれの時期ごとに割合で示した。第3期において親による模倣要求の割合が顕著に減少していることが読み取れる。第3期における母親へのアドバイスの内容は、本児の興味や関心を尊重してタイミングよく関わるということであった。筆者によるアドバイスはすぐに効果を現わし、以前の母親とは

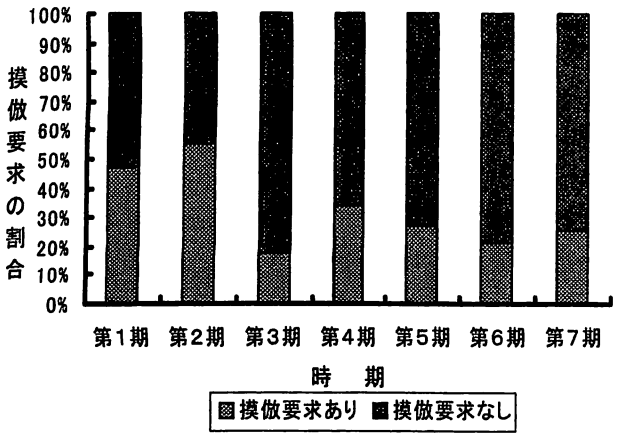

図2　親の摸倣要求

まるで別人のような変貌ぶりを示した。母親は常に本児の傍に寄り添い、本児の興味や関心を受容した上で遊びへの関わりができるようになった。こうした母親の変化を考慮すれば、第3期において模倣要求の割合が減少したのは、母親の受容的な関わりに起因していた可能性を想定できる。

すなわち、第3期では母親が本児に対して受容的に関わったために模倣を要求する頻度が減少したということである。第3期では母親による模倣要求の減少が、本児の模倣数を減少させたものと推定される。このように考えれば、第1期と第2期の模倣要求の割合は高く、これらの時期の模倣は親の模倣要求によって誘発されたものである公算が強い。確かに、第1期と第2期の音声模倣は、親がモノの操作を示範した上で、本児に「～して」と模倣を要求する場面で多く観察された。

以上のことから、第3期までの音声模倣は親の模倣要求によって誘発されることが多く、親の関わりが本児の音声模倣を支配する、いわば他者制御による音声模倣の特徴が強いと言える。

第4期以降の模倣数は第6期を除けば、増加傾向にある。また、親の模倣要求の割合は第4期で30％を超えるものの、その後は20％台で推移している。これらの結果から、第4期以降の音声模倣の増加は本児の自発的、能動的な模倣に依るところが大きいと言えるであろう。以下、第4期以降について、それぞれの時期ごとに親子の関係性との関連で音声模倣の特徴を記述する。

第4期は母親の意識変革によって、本児への積極的な関わりが見られるようになる時期であった。母親の変化に呼応して、本児は母親の動作やモノの操作を注意深く観察することが多くなり、母親をモデルとする動作の模倣やモノの操作の模倣が見られるようになった。その結果、動作や音声の模倣を通して、身体や音声の同型性から心的な同型性を感知できるようになるのではなかろうか。この時期は母親の内面性への気づきとその内面性への働きかけが特徴的である。次に示すエピソードはこの特徴をよく表している。

本児がマットの上にうつ伏せになったのを見て、母親が「でんぐりがえし」と言う。本児は母親を一瞥して「でんぐりがーえし」と言いながらマット上で転がろうとするが、うまくできない。それを見て母親が笑うと、本児は再度挑戦して、でんぐり返しが成功する。「おっ、できた、すごい。できたね」と母親が誉めると、本児はもう一度でんぐり返しをして、「できた」と言い母親を見た。母親に誉められたことがとても嬉しいようであった（エピソード125）。

本児は母親の「でんぐりがえし」という言葉を聞いて、恐らくでんぐり返しの楽しい雰囲気をイメージしたのであろう。音声模倣の語尾の音調「でんぐりがーえし」にその気持ちが込められている。

しかもこのエピソードは、母親から誉められると本児は母親の内面のポジティブな感情を感じとり、その感情に自己の感情を重ねることで母親の感情を自己の内面に同化できるようになったこと、さらに、自己の感情を「できた」の言葉に乗せて母親に伝えられることを物語っている。

模倣の成立が他者の内面の感じとりと他者の内面への働きかけの両面に影響を及ぼしていると考えれば、母子の関係性の在り様が模倣の成立に影響するだけでなく、その逆に模倣の成立が関係性の在り様を規定する側面もあるといえるであろう。その意味で、第4期の模倣は本児の社会性の発達にとって、大きな役割を担っているといっても過言ではない。

図1から明らかなように、第5期は最も音声模倣の平均数が高かった。第5期は、本児が母親の内的状態を理解することに加えて、本児自らの内的状態をも理解できるようになったために、母親との間に相補的な関係性が構築された時期であった。その結果、この時期には母子の相互作用がき

わめて良好に推移した。母子間の相補的な関係性に支えられた良好な母子の相互作用がこの時期の高い音声模倣数をもたらしているものと考えられる。

この時期の音声模倣は、母子の相補的な関係性を反映して相互的な性質を帯びはじめる。例えば、次に示すようなエピソードはその特徴をよく表している。

本児が枝豆の形をした布製の玩具のファスナーを開けて、中から豆に擬えた布製のボールを取り出し、母親を見ながら「きいろ」と言う。母親は「あっ、きいろ。これは？」と緑の豆を指差して尋ねる。本児は「みどり」と答えると、「うん、みどり」と母親は満足したように確認する。母親は枝豆の鞘から今度はピンクの豆を取り出し、「これは？」と本児に尋ねる。すると、本児はその豆を取り上げ「これは？」と母親の口調を模倣して逆に母親に尋ねる。母親は、「ピー、ピンク」と答えると、本児は「ピンク」と模倣してその豆を鞘に戻した（エピソード139)。

これまでは母親が尋ね、本児が答えるという固定化した一方向的な関係でしか成立しなかった母子のやり取りが、本期では模倣による双方向的なやり取りに変わってきた。

また、次のエピソードのように、音声模倣が母子間で相互模倣遊びとして交わされるようにもなる。

本児と母親はトランポリンの上でじゃれ合っている。本児が母親の足をつねると、母親は「痛い」と言って本児を見る。本児も母親を模倣して「痛い」と言うが、母親の様子を窺いながら、また母親の足をつねる。母親が「あいた」というと、本児は母親を見ながら「あいた・・もう」と言いつつ笑う。母親も「あいた・・もう」とくり返す。その後も同様なやり取りが数回続く（エピソード184)。

このように、模倣が母子間の遊びとしての要素を強く帯びはじめるのが本期の特徴でもある。

第6期に入ると平均模倣数は極端に減少し、第3期の水準にまで落ち込んだ。図2の親による模倣要求の割合も低く、これらの結果だけを見れば、第6期は第3期によく類似している。しかしながら、音声模倣の変化を発達的に捉えれば、その背景は大きく異なると考えるべきであろう。すなわち、前述した第4期および第5期における本児の音声模倣の特徴を敷衍して考えれば、親の模倣要求の減少が、第6期における音声模倣の減少をもたらしたと解釈することはできない。

第6期は本児を取り巻く生活環境が幼稚園から養護学校に激変したことによって、本児が情緒的に不安定になった時期であった。母親の呼びかけに応答しなくなり、突然奇声をあげて部屋をとび出すなど、以前には見られなかった行動が現れた。当然のこととして、母子の関係性は冷え込み、母子間のやり取りは極端に減少した。恐らく、第6期における音声模倣数の減少は、この時期に出現した本児の情緒不安を原因とする母子関係の不全に起因すると考えるべきであろう。その証拠に第7期になって本児の情緒不安が解消し、親子関係が改善すると平均模倣数も増加するからである。

第7期に入ると本児は学校生活に適応し、それまでの情緒的な不安定状態を脱して落ち着きを取り戻した。その結果、母親の指示に素直に従うようになり、母子の関係は以前にも増して豊かになった。こうした良好な母子関係に支えられて、これまで見られなかった「叙述の指差し」が出現し、本児は自己の内的状態を母親に伝え、それを母親と共有することができるようになった。このような母子の関係性を反映するかのように、本児の音声模倣数は顕著に増加した。第5期で出現した母子の相互模倣遊びは第6期では消失していたが、第7期になって再び出現し、活発に展開されるようになった。母子のやり取り遊びに出現した音声模倣の一例を以下に示した。

本児はトランポリンの縁に座っている。トランポリンの真中に座っている母親が「でんぐりがえし」と言い、本児に前転を要求する。本児は鏡の方を見ながら母親の方へ背中から倒れ掛かる。母親は本児の両足を掴み、「おー、ドーン」と言う。本児はトランポリンに寝転んで母親を見ながら「ケンケンパ、ケンケンパ」と言い、母親に「ケンケンパ」の動作を要求する。母親は本児を見ながら「だれが？」と問う。本児はニヤニヤしながら、「N先生」と言う。母親がすかさず「ちがいまーす」と言うと、本児は「ちがーます、おかあーさん」と言う。母親は「はーい」と言って手を挙

げ、立ち上がって本児の身体を跨って、「ケンケンパ」と言いながら跳躍する（エピソード206)。

本児は母親の「だれが？」の問いに、わざとその場に居ない先生の名前を言って、母親がどのように応じるかを期待していた。期待した通りの反応が返ってくると、本児はその反応を模倣した上で正しい答えを付加した。本児にとって、ここでの模倣は明らかに遊びの要素が強いものであった。

また、次に示すエピソードのように母親へモノの名称を尋ねる場面でも、音声模倣が出現した。

顔の型板はめ遊びで、本児が頭部の型板を母親にかざして見せた。母親は本児の意図を汲み取って、「あたま」と言う。母親の反応を待っていたかのように、本児は即座に「あたま」と模倣した(エピソード196)。

先にも指摘したとおり、第７期では本児は学校生活に慣れて精神的な安定を取り戻すと、学校や家庭において規則正しい生活を営めるようになった。この頃になると、以前は自己の要求が通らないとパニックを起こしていた本児が、母親の指示を受け入れて自己の要求を制御できるようになった。以下に示すエピソードがその例である。

遊びの最中に本児は突然プレイルームから廊下に出る（別の部屋に置いてあるシャボン玉遊びセットを取りに行こうとしたらしい)。母親は「おいで」と言って、手招きして本児をプレイルームに戻そうとするが、部屋に入ろうとしない。母親が「あとでやろうね」と言うと、本児は母親に同意を求めるように母親の目を見ながら「あとでやろうね」と言いつつ頷いた。母親が「うん、おいで中に入って」と手招きをすると、本児はプレイルームに入った。母親は「もうちょっと遊んでからやろうね」と言って遊びを再開した（エピソード185)。

本児は「あとでやろうね」という母親の言葉を繰り返し、その言葉の背景にある母親の気持ちを自己の内面に敷き写すことで、母親と同じ気持ちになり、結果として自己の要求を制御できたのであろうと推測できる。このように考えれば、本児の音声模倣は自己の行動を制御する機能をも果たしていることになる。

以上のように、第７期の音声模倣は多様なコミュニケーション場面で多様な機能を持って出現していることが指摘できる。

(3) 音声模倣の発達的変化

本児の音声模倣が発達的にどのように変化したかを明らかにするために、発話数を指標として検討した。図３は本児の音声模倣を、モデルとしての親の発話数をもとに分類し、その割合を示したものである。モデルとなる音声が１語発話の時と２語以上の多語発話に分けて、それぞれの割合を前述した親子関係の７つの時期ごとに表した。また、１語発話と多語発話のそれぞれについて、モデルの音声を正確に模倣した割合と、不完全な模倣の割合に分けて表示した。

１語発話と多語発話の模倣の割合は、第１期から第３期まではほぼ同程度であるのに対して、４期以降では１語発話の割合が高い傾向にある。しかしながら、この傾向は次に指摘する事実を加味すると、考慮すべき顕著な特徴とは言えない。すなわち、モデルとしての親の発話は第３期までと第４期以降とで質的に異なることはなく、むしろすべての時期に一貫しており、時期による変化は認められなかった。しかも、本児が選択的に親の１語発話だけを模倣したとする証拠もないことから、第３期までと第４期以降の１語発話と多語発話の割合の違いを説明する合理的な理由は存在しないからである。

１語発話の不完全な模倣の割合は、すべての時期で低く、時期による顕著な差異も認められなかった。しかしながら、多語発話の音声模倣について

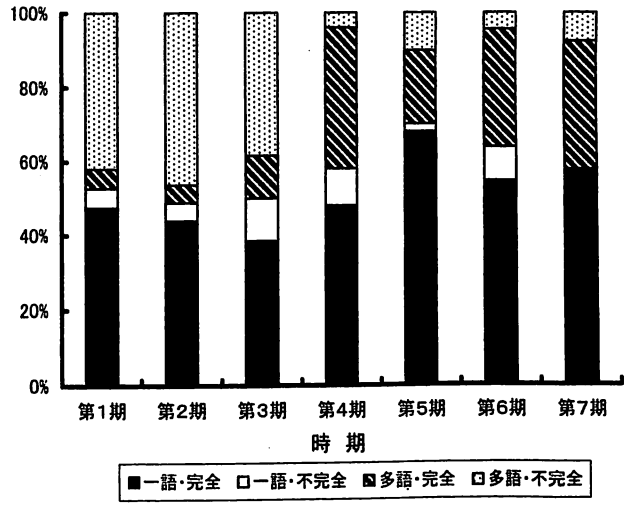

図３　一語発話と多語発話の模倣の完全度

は、完全と不完全の割合は、第３期までと第４期以降では明らかに異なっていることが読み取れる。そこで、多語発話の音声模倣の特徴を明らかにするために、発話のすべてを正確に模倣した「完全模倣」、多語発話のうち１語のみを模倣した「不完全模倣（１語)」、そして多語を模倣したものの不正確な音声模倣になってしまった「不完全模倣(多語)」の３種類に多語発話の音声模倣を分けた。そして、それぞれの種類ごとにその割合を示したのが図４である。

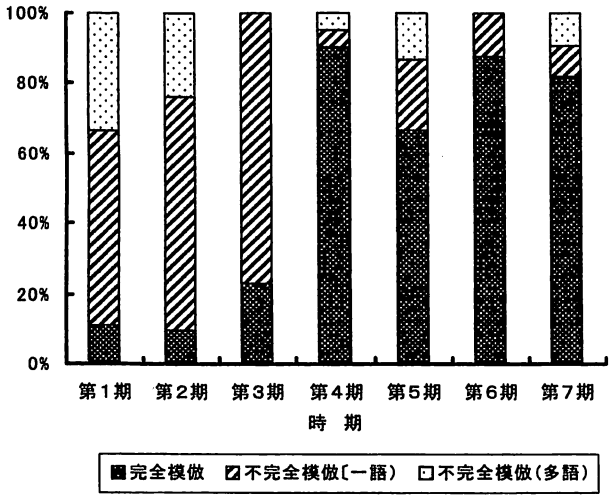

図４　多語発話の模倣の種類

第１期から第３期までと第４期以降では明らかに傾向が異なっていることが読み取れる。すなわち、第３期までは完全模倣の割合が少ないのに対して、第４期以降はその割合が圧倒的に高くなっている。また、第３期までの不完全模倣は、親の多語発話のうち１語のみを選択的に模倣しているものの割合が高いことが指摘できる。

以上の結果から、第３期までは本児は親の多語発話を１語発話としてしか模倣できないが、第４期以降になると完全に多語発話としての模倣が可能になることが分かる。このことを物語るように、第１期から第３期までの親子遊び場面における本児の発話は、すべてが１語発話の範疇に入るものであった。しかし、この時期においても親の２語発話による指示は明確に理解されていたことから、第３期までは本児は２語発話の理解は可能であったが、発語が困難であったものと思われる。ところが、第４期になると、日常生活場面における本児の発話に２語発話が出現しはじめ、その後の時期では次第にその頻度が高くなった。この事実を考慮すると、第４期以降の音声模倣は、本児が多語発話の表出構造を獲得したことによってもたらされたものであることが推定される。先にも指摘したように、第４期は親子の関係性が本質的に転換する時期であった。親子関係の改善が本児の言語発達水準を促進した可能性と同時に、本児の言語構造の発達が親子関係の変化をもたらした可能性も想定できる。いずれにしても、本児の言語発達に伴なう言語構造の充実が、第４期以降の音声模倣を支えていることは確かである。

２）動作模倣

(1)　動作模倣の特徴

第１期から第７期までのすべての時期で抽出された動作の模倣は、わずかに19場面であった。その頻度は先に述べた音声模倣の10分の１足らずであった。一般に、自閉症児の幼児期における運動・動作の模倣は、きわめて乏しく、その事実が自閉症児の模倣欠陥を主張する根拠になっている。本児も同様な傾向を示し、自閉症幼児に特有な模倣欠陥の特徴が明らかである。対照的に音声模倣の出現頻度はきわめて高いが、この事実の背景については後に論じる。

19場面で抽出された運動・動作の摸倣を、Roeyers, Oost, and Bothuyne (1998) による４つのカテゴリーに分類したところ、それぞれの頻度は、ミミクリー、２場面、エミュレーション、10場面、ファシリテーション、４場面、そして、真の摸倣、３場面となった。以下、各カテゴリーごとにそれぞれのエピソードを記述し、本児の動作模倣の特徴を明らかにする。

まず、ミミクリーの例については、次のようなエピソードを挙げることができる。

父親は本児が棚に戻したモンテッソーリ教具を見て、「違う、○子こっちじゃない、こっちだよ、こっち、こっちにお片づけして、あれ、あれを、こっち」と言いながら、片づけるべき場所とモンテッソーリ教具を交互に指さす。本児は父親の指さしの意味がわからないらしく、しばらく呆然とした後、父親の指さしを真似て、モンテッソーリ教具を指さした。しかし、その後も本児の視線は定まらず、父親の意図を理解できかねていた。結

局、父親が教具を移し替えた（エピソード7）。

父親の指さしの意図を理解できないままに模倣した本児の指さしは、ミミクリーである。

次に示すエピソードが、ファシリテーションの例である。

母親が持参した音楽テープが流れている。本児は鏡の前で三輪車に乗っている。音楽にのって「ガーガーガー」とアヒルの擬音が流れてくると、母親は本児に向けて右手を前に出し、親指と他の指を伸ばしたまま開閉する。本児は鏡越しに母親の動作を見た後、鏡の中の自己像を見ながら、左手を前に出して、握るように指を曲げ伸ばしする（エピソード19）。

恐らく、母子は当該の音楽を聴きながら、アヒルの嘴の開閉に擬えた手の振りを共有する体験を持っていたのであろう。したがって、母親の行為が既に本児の行為レパートリーの中に存在しているために、母親の摸倣がそれに相当する本児の行為手順を促進することになったものと推定される。

次が真の摸倣のエピソードである。

母親が小さなフラフープを床の上に立て、指でひねって回すと、本児はそのフラフープを母親から取り上げて母親と同じようなやり方でフラフープを回した（エピソード1）。

本児はこのとき初めて上述したフラフープを手にしており、しかも指で回すという経験も初めてであった。モデルとなった母親の動作は、本児にとって新奇な動作であったことは確かである。それ故、ここでの摸倣は真の摸倣といえるであろう。このエピソードが観察されたのは第3回目のセッション時であった。この事実から、本児は発達の比較的早い段階から真の摸倣を産出する能力を備えていたものと推察される。

最後が最も多く観察され、本児の動作摸倣の特徴を最もよく表すと思われるエミュレーションである。以下に、そのエピソードを示す。

父親は、「○子、見て、見て」と言いながら、吹き棒の先に小さなプラスチック製の球を入れるバスケットがついた玩具に息を吹き入れ、球を宙に浮かせる。それを見た本児はすぐに父親からその玩具を取り上げる。本児は右手で吹き棒を持ち、左手でバスケットごと球を真上に投げ上げる。バスケットは吹き棒からはずれて、球と一緒に床に落ちる。その後、本児はバスケットと球を拾い上げ、バスケットを吹き棒に取り付け、その中に球を入れた。そして、今度はバスケットに入れた球に向けて直接息を吹き掛けた。当然のことながら、球は全く宙に浮かばなかった。本児はその玩具を放り投げて遊具棚に移動し、別の玩具を取り出して遊びはじめた（エピソード2）。

球を投げ上げた行動から、本児はバスケットの中の球が宙に浮く場面を再現しようとしていることがわかる。また、このことは本児が父親の動作の目的を的確に把握していることを物語っている。しかしながら、結果だけに注目して、それを再現しようとする、いわゆる「結果の摸倣」になっているため、不完全な摸倣になった。ただ、結果をもたらすプロセスを本児は全く理解していないわけではない。その証拠に、「宙に浮いた球」を実現するために息を吹きかける行動を再現しているからである。ただ、どこに、どのように吹きかけるかが欠落していたのである。結果の再現に対する過剰な関心のため、不完全な摸倣になってしまったのではないだろうか。

次も同様なエミュレーションの場面である。

父親が三輪車を片足で蹴って立ちこぎしている。本児はそれを見て、別な三輪車のハンドルを両手で握り、後部のステップに左足をのせる。しかし、右足が左足より前のサドル側部に接地しているため，足でこぐというよりも手で引っ張るという状態になり、上手く前方に動かない。足を換えて再度挑戦するが、やはり上手くできず、あきらめてしまう（エピソード13）。

本児は父親の片足立ちこぎを再現しようとしていることは明らかである。しかし、足の位置や重心の移動，足の蹴りなどが再現され、統合されていないために不完全な模倣になっている。

以上の結果から、動作の模倣は音声模倣に比べて極端に頻度が低かったが、本児なりの特徴をよく表していることが明らかになった。すなわち、本児はモデルの新奇な行動をその形態と適切な機能的文脈の両面で再現でき、真の模倣を実現できる能力を備えていたものと推測される。しかし、愛着対象としての母親がモデルであっても、真の模倣が生じる頻度は極端に低かった。対照的に、本児は動作の結果に対する強い志向性を持つため

に、エミュレーションが多く出現した。その結果、完全な動作が再現されるミミクリーや真の模倣とは違って、モデルの動作は部分的にしか再現されず、不完全な模倣に終始した。こうした本児の動作模倣の特性が、自閉症児の一般的な特性として指摘できるかどうかについては、今後詳細に検討してみる必要があろう。

(2) 動作模倣と親子関係

先に述べた親子関係の質的変遷と動作模倣の関係については、抽出された動作模倣の数が少なかったために、それぞれの時期ごとにその特徴を描き出すことはできなかった。しかしながら、本児の動作模倣に発達的変化を見出すことができなかったわけではなかった。本児の動作模倣に表された発達的変化を大枠で捉えると、次に示すような一定の傾向が読み取れた。

第1期から第3期までの動作模倣は、先に記述したエピソード2で明らかなように、ヒトよりもモノにその焦点が置かれていた。そのために、本児はモノの動きがヒトの動作との関係で生起していることを十分に認識していない。つまり、本児は球が宙に浮くという現象だけを再現させたいために、そのことだけに注意が集中してしまう(「結果の再現」)。それ故に、モデルとしての父親の動作と球の動きの関係、すなわち父親がその球にどのように働きかけているかということに関心が向かないために、結果として、上手く模倣が成立しなかった。

本児は「結果の再現」に注意が集中して、ヒトへ関心が向かないために、結果が再現されないと、すぐに興味が失せて他の遊びへ関心が移ってしまった。本児は上手く再現するにはどのようにすればよいかを知るために、モデルの動作を再度参照して模倣を試みることはなかったのである。

ところが、第4期になって、本児が母親への志向性を見せはじめると、母親の行動に注目することが多くなり、動作模倣にも質的な変化が現れてくる。次のエピソードは母親の縄跳びを真似て,本児が縄跳びに挑戦している場面である。

本児は母親が縄跳びをしているところを見て、「あー」と叫んで母親から縄を奪い取る。すぐに本児は鏡の前に行き、両手に持った縄を前後に振って、2、3回跳びはねた。しかし、本児の動作は縄跳びにはなっていない。次に、縄を持った両手を頭上で後ろから前に大きく振ると同時に縄を回して跳ぶが、依然として縄跳びはできていない。本児は鏡を見ながら何度か挑戦するが、縄跳びができない。すると、本児は母親に視線を向けながら、自分が持っている縄を母親に渡した。母親は本児の意図を汲み取り、縄跳びをやってみせる。本児は母親の動作を凝視した後、先程と同じように「あー」と叫んで母親から縄を奪い取り、鏡で自分の姿を見ながら再度縄跳びに挑戦する。上手くできないとわかると、本児は縄跳びをやめ、その場から離れた(エピソード16)。

この時期になると、本児はヒトとモノとの関係で縄跳びが成立することを理解し、その関係に注目するようになった。そのため、上手くできないと、すぐにあきらめるのではなく、母親に縄を差し出し、モデルを再確認した上で再挑戦を試みた。こうした模倣行動の特徴は、第5期以降も同様に確認された。

エピソード2もエピソード16も結果を再現するための部分模倣には違いなく、しかも両場面ともに本児は自らの模倣が不完全であることをわかっている。2つのエピソードが異なるのは、前者がモノに、後者はヒトに関心が向いている点である。それ故に、第3期以前と第4期以降では「結果の再現」に失敗した後の本児の行動に大きな違いが生じたのであろう。

第4期以降は親子の関係性が飛躍的に改善する時期であった。親子の相互作用が増加することによって、ヒトとモノの関係についての認識が深まった結果、動作の模倣が質的に変化したと考えれば、親子の関係性の在り様と本児の動作の模倣は密接な関係があると言えるだろう。

全体討論

本研究は、幼児期後期から児童期前期までの2年9ヵ月にわたる親子の自由遊び場面で観察された対象児の模倣行動の特徴を明らかにした。そして、それらの特徴を親子関係の質的な変遷との関連で考察した。

まず、第1に指摘しなければならないのは、音

声模倣に比べて動作模倣の数が極端に少なく、両者の出現頻度に大きな違いが見られたことである。自閉症児が運動・動作やジェスチュアーの模倣に困難を示すことは、冒頭で指摘した通りである。しかし、動作の模倣に欠陥を示す自閉症児でも、他者の音声を反復模倣する音声的エコラリアは、対照的に高頻度で出現することがよく知られている。同じ模倣行動でありながら、音声模倣と運動・動作の模倣の頻度がなぜ異なるのだろうか。この疑問点について、２つの説明が考えられる。

１つは、モデルの行動を自己の行動へ転写する仕方に違いがあるために、頻度の差が生じるとする説明である。音声模倣においてはモデルの音声と自己の音声を聴覚という同一モダリティで獲得でき，それらを直接的に比較できるのに対して、動作模倣ではモデルの動作と自己の動作を直接には比較できない。動作模倣においては自己と他者は異なったモダリティを通じて知覚されるため、モダリティ間の転写、すなわち交差様相転写(cross-modal mapping)が必要となる。Meltzoff & Gopnik (1993) によれば、自閉症児はこの交差様相転写の能力に弱さがあることが指摘されている。こうした自閉症児の特性が音声模倣と動作の模倣の頻度差をもたらした可能性が考えられる。

２つは、音声模倣とは異なり、運動・動作やジェスチュアーの模倣が、ある種の「視点取り」(perspective taking) を必要とするため、頻度差が生じるとする説明である。「見えたようにする」のでは、正確な模倣は成立しない。相手の視点に立ってその運動・動作をなぞる、つまり「相手がするようにする」ことができなければ、模倣は成立しない。このことが、まさに「視点取り」である。自閉症児は視点移動をして他者の視点に立つこと自体に大きな制約があることは周知の事実である。動作模倣が生じにくい背景として、こうした自閉症児に特有な制約が働いている可能性が考えられる。

恐らく、自閉症児が動作模倣に弱さを持つのは、動作模倣が交差様相的な特徴を持ち、交差様相転写には原初的な「視点取り」が必要とされるからであろう。

第２は、模倣と親子関係の質的変遷との関連についてである。本児の音声模倣はその性質と頻度の両面において、親子関係の在り様を如実に反映した。

第１期から第３期までの親子関係が相互性を持たない時期では、本児の音声模倣は専ら親の模倣要求に応えたものであった。ところが、第４期になって、親の情動や意図などの内面性に気づきはじめ、なおかつその内面性に働きかけるようになると、本児の音声模倣は活発に展開されるようになった。そして、自己の内面性への気づきも加わって、親との相補的な関係性が実現しはじめる第５期になると、本児の音声模倣は親とのコミュニケーション場面で頻繁に出現するようになり、相互模倣遊びのように音声模倣自体が遊びの様相を帯びはじめた。このように本児の音声模倣の性質は、親子の関係性の変遷と軌を一にしながら大きく変化した。

他方、本児の動作模倣はその出現頻度が低く、親子関係の質的変遷との関連について定量的な分析を行うことはできなかった。しかしながら、個々のエピソードについての質的分析を通して、本児の動作模倣の特徴、および動作模倣と親子関係の質的変遷との関連を描きだすことができた。

本児はモデルの運動・動作の意味を的確に把握できるにもかかわらず、一連の運動・動作が結果として産出した現象のみに注意が焦点化するため、その現象の再現に執着する、いわゆる「結果の模倣」が多く出現した。当然のこととして、結果を生み出す一連の動作には注意配分 (attention allocation) がなされないために、運動・動作の一部分だけが再現されるか、もしくはモデルの運動・動作とは異なる独自な動作が採られることになり、いずれの場合も本児の模倣は不完全な模倣になった。このような、いわゆるエミュレーションとして同定される模倣が、本児の動作模倣の特徴を最もよく表している。

動作模倣と親子関係の質的変遷の関連については、第３期までと第４期以降では動作模倣の性質が異なることが明らかになった。すなわち、第３期までの動作模倣は親の動作よりも、親が操作しているモノに注意が焦点化されるのに対して、親子の関係性が飛躍的に改善する第４期以降になると、親への関心が高まり、ヒトとモノの関係で動作を捉えた模倣が多く出現するようになった。こ

のことは、動作模倣も親子の関係性を確実に反映していることを物語っている。

以上のことから、音声模倣と動作模倣のいずれも親子の関係性の在り様と密接な関連があることが明らかになった。前述したように、音声模倣、動作模倣ともに第４期が大きな転換の時期になっていた。この時期は、本児が親の内面性に気づき、その内面性に働きかけることができるようになった時期、いわゆる心の理論の萌芽の時期として位置づけることができる。模倣の質的変化と対人関係の転換が丁度、この時期で重なることについては、その因果性や心の理論の獲得との関係も含めて今後の検討課題としたい。

また、模倣と親子関係の関連については、親子の関係性が模倣の性質に影響を及ぼすことは必至であるが、同時に模倣が親子の関係性に影響することも想定できる。一般論として換言すれば、対人社会性と模倣は相互作用の関係にあると主張できる。Meltzoff & Gopnik (1993) は、新生児が模倣できることを発見し、この新生児模倣が親と子どもの間の情動共有や共感をもたらすと考えた。言い換えれば、動作の模倣は情動などの他者の内的状態を伝え、自己に他者と同じ内的状態を体験させる架け橋になると言うのである。このことを敷衍して考えれば、自閉症児に意図的、組織的に模倣を行わせることによって、他者の内的状態を体験させることができるかもしれない。自閉症児の指導法を展望したとき、他者との関係性の調整は勿論のこと、模倣訓練が自閉症児における社会性障害の改善に道を開く可能性があるかもしれない。

謝　辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました本児とご両親に厚く御礼を申し上げます。本児の健やかなご成長を祈りつつ、ここに記して感謝の意を表します。

参考文献

Baron-Cohen, S., Leslie, A. M. and Frith, U. (1985). Does the autistic child have a 'theory of mind'? Cognition, 21, 37-46.

Bartak,L., Rutter, M. and Cox, A. (1975). A comparative study of infantile autism and specific developmental receptive language disorder: I. The children. British Journal of Psychiatry, 126, 127-45.

Charman, T. and Barn-Cohen, S. (1994). Another look at imitation in autism. Development and Psychopathology, 6, 403-13.

Curcio, F. (1978). Sensorimotor function and communication in mute autistic children. Journal of Autism and Childhood Schizophrenia, 8, 282-92.

Curcio, F. and Piserchia, E. A. (1978). Pantomimic representation in psychotic children. Journal of Autism and Childhood Schizophrenia, 8, 181-9.

Dawson, G. and Adams, A. (1984). Imitation and social responsiveness in autistic children. Journal of Abnormal Child Psychology, 12, 209-26.

Dawson, G. and Lewy, A. (1989). Arousal, attention, and the socioemotional impairments of individuals with autism. In G. Dawson (ed.), Autism: Nature, Diagnosis, and Treatment (pp. 49-74). New York: Guilford Press.

DeMyer, M. K., Alpern, G. D., Barton, S., DeMyer, W., Churchill, D. W., Hingtgen, J. N., Bryson, C. Q., Pontius, W. and Kimberlin, C. (1972). Imitation in autistic, early schizophrenic, and nonpsychotic subnormal children. Journal of Autism and Childhood Schizophrenia, 2, 264-87.

Hammes, J. G. W. and Langdell, T. (1981). Precursors of symbol formation and childhood autism. Journal of Autism and Developmental Disorders, 11, 331-46.

Hay, D. F. and Murray, P. (1982). Giving and requesting: Social facilitation of infant's offers to adults. Infant Behaviour and Development, 5, 301-10.

Hertzig, R. P., Snow, M. E. and Sherman, M. (1989). Affect and cognition in autism. Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry, 28, 195-9.

神園幸郎 (2001) 自閉症児にみられる対人関係の逆転現象. 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要. 第3号, 15-36.

神園幸郎 (2002) 自閉症児における対人関係の変遷と鏡像反応の関連について. 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要. 第4号, 1-17.

Kugiumutzakis, (1999). Is early human imitation an emotional phenomenon? In S. Braten (ed.), Intersubjective Communication and Emotion in Ontogeny. Cambridge: Cambridge University Press.

Loveland, K. A., Tunali-Kotoski, B., Pearson, D. A., Brelsford, K. A., Ortegon, J. and Chen, R. (1994). Imitation and expression of facial affect in autism. Development and Psychopathology, 6, 433-44.

Meltzoff, A. N. (1988). Infant imitation after a 1-week delay: Long-term memory for novel acts and multiple stimuli. Developmental Psychology, 24, 470-6.

Meltzoff, A. N. and Moore, M. K. (1989). Imitation in newborn infants: Exploring the range of gestures imitated and the underlying mechanisms. Developmental Psychology, 25, 954-62.

Meltzoff, A. N. and Gopnik, A. (1993). The role of imitation in understanding persons and developing a theory of mind. In S. Baron-Cohen, H. Tager-Flusberg and D. J. Cohen (eds.), Understanding Other Minds (pp.335-66). Oxford: Oxford University Press.

Morgan, S. B., Curter, P. S., Coplin, J. W. and Rodrigue, J. R. (1989). Do autistic children differ from retarded and normal children in Piagetian sensorimotor functioning? Journal of Child Psychology and Psychiatry, 30, 857-64.

Nadel, J. and Peze, A. (1993). What makes immediate imitation communicative in toddlers and autistic children? In J. Nadel and L. Camaioni (eds.), New Perspectives in Early Communication Development (pp.139-56). London: Routledge.

Nadel, J., Guerini, A., Peze, A. and Rivet, C. (1999). The evolving nature of imitation as a format for communication. In J. Nadel and G. Butterworth (eds.), Imitation in Infancy (pp.209-34). Cambridge: Cambridge University Press.

Ohta, M. (1987). Cognitive disorders of infantile autism: A study employing the WISC, spatial relationships, conceptualization, and gestural imitation. Journal of Autism and Developmental Disorders, 17, 45-62.

Roeyers, H., Van Oost, P. and Bothuyne, S. (1998). Immediate imitation and joint attention in young children with autism. Development and Psychopathology, 10, 441-50.

Rogers, S. J., Bennetto, L., McEvoy, R. and Pennington, B. F. (1996). Imitation and Pantomime in high functioning adolescents with autism spectrum disorders. Child Development, 67, 2060-73.

Rogers, S. J. and Pennington, B. F. (1991). A theoretical approach to the deficits in infantile autism. Development and Psychopathology, 3, 137-62.

Rogers, S. J. and Pennington, B. F. (1991). A theoretical approach to the deficits in infantile autism. Development and Psychopathology, 3, 137-62.

Sigman, M. and Ungerer, J. (1984). Cognitive and language skills in autistic, mentally retarded, and normal children. Developmental Psychology, 20, 293-302.

Smith, J. M. and Bryson, S. E. (1994).

Imitation and action in autism: A critical review. Psychological Bulletin, 116(2), 259-73.

Tomasello, M., Kruger, A. C. and Ratner, H. H. (1993). Cultural learning. Behavioral and Brain Sciences, 16, 495-552.

Tomasello, M., Savage-Rumbaugh, S. and Kruger, A. C. (1993). Imitative learning of actions on objects by children, chimpanzees, and enculturated chimpanzees. Child Development, 64, 1688-705.

Whiten, A. and Brown, J. (1997). Imitation and the reading of other minds: perspectives from the study of autism, normal children, and non-human primates. In S. Braten (ed.), communication and emotion in Ontogeny: A Sourcebook, Cambridge University Press.

Wood, D. (1989). Social interaction as tutoring. In M. Bornstein and J. Bruner (eds.), Interaction in human development (pp. 59-80). London: Basil Blackwell.